
ジェネティック・レボリューション

ナマケモノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジエネティック・レポリューション

【Nコード】

N4929X

【作者名】

ナマケモノ

【あらすじ】

50年前、異能の力を発現し始める。

主人公角川七音は、同級生の小波優と共に非日常に身を投じる。
異能学園バトル

第1話 学校

カツ、カツ、カツ、カツ……。静寂に包まれた教室内に
甲高くチヨ

ークを黒板に打ちつける音が響く。

音に続き、繊細と呼ぶには程遠い、歳のいった男性教諭の無骨な手で文字

が描かれていく。新たに書き足された板書をみてそれをノートに書き写す。

授業の行われている教室。

当然ノートをとっているのは俺だけではない。

カリカリ、サラサラと各々のやり方でペンを練り、勉学に励んでいる。

ふと教室を見渡せば真面目に授業を受けているものは多い。

物事には手を抜いていいものとそうでないものに分かれる。

この授業は手を抜いてはいけないものなのだと、それを皆理解しているのだ。

「グオーツ、グオーツ。」

今年2年生になった俺たちだが、この教師の授業を受けるのは決して初

めてではない。

1年のときにも経験済みなのだ。

そしてその経験は多くのものにとって苦いものとなった。

泣きを見た人間は数知れず。彼らは一人残らず後悔したことだろう。

なぜ自分はノートを取らなかったのか、と。

この教師のやり口を学習した彼らは二度とこのような事態は招くまいと誓い

を立てた。その結果が今俺の前にある秩序の保たれたこの静謐な空間なのだ。

「スピーツ、ムニヤムニヤ。」

この教師の生徒に自主的に真面目に授業を受けさせるという思惑は見事成功

したとあっていい。

しかしながら何事にも例外はあるものでこの世に100%や絶対というもの

はありえないのだ。この状況において眠っている強者。

今現在このクラスにおいて眠っている猛者。

あるうことかそいつは俺のとなりにいるのだ。不真面目な授業態度が後に自

分にどう帰ってくるか、一度それを経験したならそうは忘れそうにないものだが。

覚悟の上で寝ているのか何も考えていないだけなのか、はたまた授業を受ける

必要もない桁違いの頭脳を持ち合わせた天才児か。

いずれか、と聞かれたならば俺はこう断言できる。1番目は問題外で2番

目は大正解。3番目は半分正解。よく天才と馬鹿は紙一重だといわれる。

半分正解。ようするに、筋金入りの馬鹿なのだ、こいつは。

ベクトルさえ変えれば天才になれるのではないかと思えるほどに。

「よし、今日はここまでだな」

区切りのいいところで板書を書き終え、腕時計をみて終了を宣言する教師。

そのタイミングはちょうどよく、宣言の後教室に備え付けられたスピーカー

ーからチャイムの電子音が鳴り響く。

合わせて、生徒たちも後片付けを始め、にわかに教室が騒がしくなる。

先ほどまでの水を打ったような静けさは一瞬で消失した。

それでも隣席の男は目覚めない。

1時間目から3時間目が終わる今の今までずっとこの調子だ。

よほど深い眠りにしているのか休み時間に入った今も起きる気配は微

塵もない。

流石に眠りすぎだろう、とは思いつつも生憎起こし

てやろうなどという甲斐性を俺 角川 七
音は持ち合わ

せていない。

起こしてやったところで俺にメリットがあるわけではないからだ。

それに見ようによっては起こさない方が親切ということもあるだろう。

睡眠を妨げられるということはそれだけで不快なものだ。

隣席の人間についてはいつものように無視を決め込むことにする。

教科書をしまっ代わりに1冊のカバーをかけた文庫本を取り出す。

退屈でたまらない休み時間。

それもいつものこと。もう慣れた。

俺は本に没頭して次の授業までの時間を潰すことにひたすら努めることにした。

第1話 異能力

学生にとってあるいは社会人にとっても憩いとなる昼休み。

午前までの疲れと空腹を食事によって労う時間。

それは俺も例外ではなく机の上に弁当の包みを広げている。

黄色い楕円型の二段になったランチボックスにはそれぞれおかずと白米

が分けてつめられている。

大きさは小さめ。

育ち盛りには厳しいだろうという意見もあるかもしれないが俺は小食なので

これで十分なのだ。

対して俺の対面にいる男は大食らいで売店で買ってきたパンが4つ5つまと

めて机に置かれていた。

見ているだけで小さい自分の胃袋が余計に膨れてしまいそうだ。

「いやー、快眠ってこういうことかぁ？溜まってた疲れが吹っ飛んだぜ。」

「それはなによりだ。睡眠不足は現代人の敵だからな。」

戦利品のひとつ、カツサンドを口いっぱいにはお張りながら正面のやつが

言うことに少々の皮肉を交えて相槌を打つ。

先ほどまで俺のとなりで眠っていたこの男は五反田 亮介という。

授業態度は至って不真面目。

極度の勉強嫌いで元のない頭がさらに拍車がかって残念なことになる。

が、それでも人間取り柄のひとつや二つはあるもので、その知能を補うかのような高い運動能力がその体にそなわっている。

時折行われる体力テストの成績は常にA評価。

通知表でも満点以外をとったことはないらしい。要するに、この男は脳みそまで

筋肉でできているといっても過言ではない典型的な体力馬鹿なのだ。

「それにしてもカツサンドとはなかなか豪勢なものを手に入れたな。

得意の体力にものをいわせたか」

「べつにたいしたことじゃねーよ。あんなモンちよいちよいって人ごみ避けていけば簡単に買えるぜ?」

「普通の人間にはそのちよいちよいちよいが難しいんだ。相変わらずそ

っち方面のスペックは無駄に高いな、お前は」

「ありがとよ。食うか?」

俺の皮肉に気づきすらしていない。礼を言うような場面ではないだろう。

勘違いの上、差し出されるカツサンド一切れ。

有難く受け取り、無言で五反田の元へ俺の弁当箱から適当なおかずを見繕う

てひよい、と箸でつまんで開けられたビニールの上に移動させる。

無料でものをもらおうなどと都合のいいことは考えていない。

無料より高いものはないというくらいだ。

等価交換は世の必定。見返りは与えなければならぬ。

取引を終えて俺はもらったばかりのカツサンドにかぶりつく。

ジューシーな肉汁が俺の口中を満たし、味覚を刺激した。

貰い受けたカツサンドを味わう最中、五反田が俺の貢物に対する抗議の声をあげた。

「おい、七音。なんで野菜なんだよ。俺は肉をやったんだから俺にもそっちのミートボールくれよ。」

取引材料として俺が渡したのはトマトにレタス、ブロッコリーの色とりどりの野菜。

五反田本人はこの結果にいささか不満が残るらしい。

ふむ、どうやって説き伏せたものか。そこで俺はもう一品追加してやることにした。

それを弁当箱ごと持ち上げてザラザラと箸でビニールの上に移してやる。

「……こいつはどっいうことだよ。俺はそのちょうどいい塩梅にとろっとした

あんかけのかかったミートボールを寄越せって行ってんだよ！

それなのに渡されたのは、「豆とくらあ！」

「落ち着け、五反田」

「こいつが落ち着いていられるかってんでい！」

宥めるもすっかり興奮しきっているのか口調が江戸っ子じみている。昼食のおかずでここまで怒るとは、恐ろしきは食い物の恨みということであるつか。

もっともその癩癩玉を爆発寸前まで導いたのは誰であろう俺自身なのだが。

まあここまでは予測済みだ。そしてこれから起こることも。

「いいか、五反田。お前は肉をやったから肉がほしい、そういったこれは豚だろうと牛だろうと、はたまた多くの人間が忌避反応を示すであ

ろう蛇だか鰐の肉でもいいとそういうことだな？」

「うん、まあな。」

……そうなのか。

「では、その豆が何なのかお前に教えてやろう。それは大豆というものだ。

そもそも肉の定義とはなんだろうか。俺はこう思う。

食感や味も大事かもしれない。だが食事というものは元来栄養を摂取するとい

うためにとられる生き抜くための行為だ。もっとも重視されるのは栄養。

食材に含まれる栄養分。ビタミンという観点から見ただけでも、

Aが足りなければ視力の低下、Bが足りなければ脚気、神経痛、反射神経の低下、

Cであれば壊血病等々。

栄養の不足は多種多様の病を招く原因となる。過剰な摂取ももちろんのことだがな。」

ここまでいったところで五反田の真面目に保っていた顔が崩れ、目を丸くしてぼかんとした表情に切り替わる。

こいつは何をいつているのだろう、と。

首がかくんと半ば自動的に、恐らく無意識にだろう。45°ほど傾いた。

「肉には、多くのたんぱく質が含まれている。そして大豆にはそれに負けない

だけのたんぱく質が含まれている。畑の肉というほどの別名で呼ばれるく

らいにな。知っているか、世の中のベジタリアンがそのたんぱく質不足を補

うために食べているのが何であるつ豆類だ。ゆえに俺はこつ結論づける。」

最後のカツサンドを口にほつり、咀嚼してパツクのお茶をズズツといささか

下品な音をたててすすり、口の中のものを胃袋に流し込んでやる。

「大豆も、肉」

「……………肉？」

「そつだ」

「にく」

「ああ」

「にくうううううー……………!!!!!!」

五反田がもろ手をあげて喜色満面の笑みを浮かべる。椅子が後ろに傾き前の2つ足が地を離れかろうじてバランスを保っている。

理解の放棄という名の納得。ここに契約は完了した。

バカのコントロールは、ちよろい。顔には出さず内心で含み笑いをする。

しかし俺は思うのだ。こいつはいつか絶対に詐欺師に引っかかる。

目の前で俺の渡した野菜ともども清清しく大豆を食す阿呆をみて確信する。

とは思いつつも何とかしてやろうとは微塵も思わない。

なぜならそうというのは自分で気づいてこそ意味がある。そうだろうか？

ガツガツと自分の昼食にがつつく目の前の阿呆を冷めた目で観察しつつ

俺は自分の箸を肅々と動かし昼食の消化に努めた。

校内、中庭近くの玄關に設置された自動販売機前。

昼飯を平らげた俺と五反田は飲み物を買いにきていた。

「しかし、あれだけのタイムロスをしてまで購買の人気商品

を手に入れてくるとはたいしたものだな。化け物か、お前は」

驚いたことに俺たちの通うこの緑翠高校には食堂がない。

必然、弁当を持参していない者は購買へと赴く。

食堂のある高校よりも購買の利用率が高くなることは推して知るべし。

ゆえに開店5分で売切れてしまう競争率の高い人気商品も存在する。

その中のひとつがカツサンド。手に入れただけでも驚きだがこの男。

朝から眠りこけて起きたのが昼休み開始5分後。

体内時計が知らせたのか覚醒した体は食を求めて購買へと駆けた。

そのハンディキャップを背負いつつまともでかつ上等な昼食を手に入れたの

だから素直に感心する。

食後の一杯に何を飲むか悩んだ末に無難に緑茶を選択する。

なにやらわからない新製品も出ているが俺は冒険家ではない。

そういうのはこういう人間の役割だ。

俺の後に続いて硬貨を投入した五反田は寸分の迷いなくその新製品を押しした。

「勇者の薬草」。缶にプリントされたラベルにはそう書いてあった。

「……やはり選んだか。」

「おう、だってどんな味か気になんじゃん。」

カシュツと小気味いい音を立ててタブを起こして350ml缶を煽る。

「……………どうだ？」

「……………まずい。けどなんかもう一杯いきたいような……………」

「とんだマゾヒストだな」

黙って俺も購入した緑茶に口をつける。

口の中を洗い流すかのような軽い渋みが口中に広がる。

食後の一杯にはちょうどいい心地のよさ。

「別に俺は全然すごいうちにはいんねえよ」

先ほどの俺の言葉に対する返答だと気づくのに少々時間を要した。

「そりゃあ普通の人間と比較すりゃあ俺は結構すごいうちに

入るかもしれないけどさ、世の中じゃあ俺の運動神経なんか何の自慢にもなんねえそれ以上の力持ったやつらがうじゃうじゃいんじゃねえか。」

「……………そうだな。」

五反田の言うことは決して謙遜ではない。

第3者の視点から客観的に分析してもそう思う。

今から50年ほど前に話は遡る。

歴史上、人間は多くの艱難辛苦に見舞われ、そのたびに

それらを乗り越え進化を果たしてきた。

訪れる多くの転機。その中の一つとして50年前にもそれは起こった。

世界中で起こった不可思議な現象の数々。

各地で不思議な能力に目覚める人々が現れ始めた。

いわゆる超能力。

マッチやライターを使わず何もない空間から火を

生み出したり、飛行機やパラグライダーも使わず単身飛行をしたり、

自由自在に雨、雪、台風天候を自在に操ったり、e t c、e t c、

…。

当然その出来事は多くの人々の困惑と混乱を招いた。

また、軋轢も。一般人とそうでない人間の差別。

力ある人間の力なきものへの迫害。

犯罪の増加。

状況に適応して能力の軍事利用を目論み、自国の利を得んとする政治的駆け引き。

かくして世界は誰も予想し得なかった変革の時を迎えた。

それぞれがそれぞれに適応、順応しようと変わっていく。

俺たちの住んでる日本もその影響を免れることはできなかった。

能力を使って犯罪を起こす者、それに便乗する者。

逆に力の使い道に苦しみ、自殺する者。

このようなケースは数えればきりがなかったという。

それでも微々たる努力の積み重ねの末徐々にそれらのトラブルはなくならないまでも減少の一途をたどっていった。

そして50年経った現在。

ある程度政策も整備され能力者のことも加味したものになっていった。

大きなものとしてまず政府が能力者対策のための組織をつくったこと。

独立治安維持組織、ゴスペル。

とはいえその歴史は浅く、できたのは約10年前。

能力者のかかわる事案の解決を目的としている。

毒をもって毒を制すとは少々たとえが悪いかもしれないが、このゴスペルという組織

は多くの能力者を抱えており、主にその能力者たちが事件の解決にあたる。

平たく言ってしまうえば警察のようなものだ。

この組織の効果は大きく、犯罪率の減少、検挙率の上昇、

そして何より、怪我人、死者の数が圧倒的に減った。

毒は毒となりえず、薬の役目として正常に社会の歯車の機能を果たしている。

もうひとつ大きな改革として教育機関の改革が挙げられる。

一般的に能力は14〜17歳くらいの間に発現することが多い。

思春期真っ盛りの年齢だ。能力者の生まれた初期の種々雑多なトラブルで

何が一番多かったかというところと能力の暴走が挙げられる。

自分に突如として発現した能力に戸惑い、制御できず勝手に発動、暴走

というパターンがもつとも多かった。

当時はまだ対策のたの字もなく能力者を止めるためにはやむなく人海戦術

で押し切り、能力者を殺傷というケースもざらにあつたらしい。

そのような悲しい事故を防ぐために打ち出されたのが能力者専門学校の教育。

能力が発現および発現の兆候が見られる子供たちはその能力者専門の学校へ

強制的に転校させられる。

そのために俺たちぐらいの年齢の子供には半年に一回能力の有無を調べる

検査が義務付けられている。

対象年齢とされる中学2年生からその検査は始まり、今、高校2年生に至る。

留年することもなくここまで来たので俺は今17歳。

検査は春と秋に行われ、すでに春の分の検査は終えている。

次の秋の検査が最後でそれさえ終われば以降検査はない。

18歳以上の人間に能力が発現した例はないからだ。

それは原則とでもいうべきもので、50年前に最初に覚醒した人々もそうだったという。

能力が発現したのは少年少女ばかり。

さまざまな仮説が今も飛び交っているものの、確実にこれだと

いえる理論は未だ証明に至ってはいない。

ちなみに発現した能力は生涯消えることはなく、

歳を経て弱まりはするものの、決してなくなることはない。

一生折り合いをつけてなんとか付き合っていかなければならないわけだ。

本当に。そう本当に望まずして能力を発現した人間からすれば

はた迷惑な話である。

とはいえ能力の発現する確率はほんの2%に満たないほどののだという。

100人に二人いるかいないか。

そのうちの一人になることは果たして幸か不幸か。

渴いたのどを渋い緑茶で潤す。ふっと一息。

そんな俺の落ち着いた心境をないがしろするかのように

俺たちのいる前を慌しく、女子の集団が通り過ぎて騒々しくなっていく。

全員漏れなく体操着姿。

見覚えのある顔がちらほら。同じクラスの女子だ。

「あれ、七音。次って俺らも体育じゃね？教室戻って着替えねえと」

心底つきつきといった様子で飲み干した缶をゴミ箱に入れて

教室に向かおうとする五反田。

「違う。朝の話を聞いていなかったのか？武田、午後から

出張でいないから男子は教室で自習だぞ」

「ナ、ナンダッテッ！！」

だが俺はその背を容赦なくバツサリと言葉の刃で切り捨てる。

飲み干した緑茶の缶をゴミ箱に放り投げる。

放物線を描いて吸い込まれるようにそれはゴミ箱にポツシュート。

教室に向かおうと歩き出す。

五反田を見やれば奴は放心していた。

まあ、運動を生きがいにしているような男だ。

その機会が失われればショックも受けるか。

また一人、一人と俺と放心している五反田の前をキャピキャピと

やかましい女子が通り過ぎていく。

だからなのかもしれない。その女が目が付いたのは。

その女はひどく物静かで誰と一緒に歩くでもなく一人。

それでも一際存在感を示しているように俺には見えた。

もつとも、外見の時点で大分人目につくかもしれない。

そいつは女子らしくなく髪の手入れが一切なっていなかった。

それなのに長髪なものだからいつそうひどい。

枝毛の数は数え切れず冬の庭ではしゃぎ回る犬のように、縦横無尽に跳ね

回っている。

背は女子にしては高めで160センチは超えているだろうか。

表情は至って無表情。

一人でいるときにニヤニヤと笑っていたならばそれはそれで気持ち悪いが

俺がいたいのはそういうことではなく、それがデフォルトで冷たい鉄のような

印象を受けたとでもいえばいいのか。

それなのに下手に顔立ちは整っているものだからある意味マッチしているといえ

なくもない。

小波 優。

その名前は校内において有名だ。

成績優秀で運動神経も抜群と優等生のような誰もが羨むステータス。

だがその反面で遅刻や早退も多くさらにウワサでは喧嘩を

しているだとか何とか。

実際偶然だが小波が傷を負っているところを見たことがある。

ふとした拍子にまくれた袖から仰々しく巻かれた包帯とわずかな

切り傷がそこから覗いてた。

だが所詮ウワサはウワサ。

興味もなければ好奇心に駆られることもない。

ただ名前をよく聞く。それだけ。

俺の価値観からすればテレビの中の芸能人となんら変わりない。

周囲がどれだけ騒ごうが俺には関係のない話だ。

その件の人物が通り過ぎるのを横目で流し見してから俺は

固まった五反田をせっつき、進路を教室へと向ける。

ふと、目の前の掲示板が目につく。

この前行われていたテストの成績順位が貼り出されていた。

上位30名の成績優秀者は総合点数、クラス、名前と併に貼り出されるのだ。

大変困ったプライバシーもへったくれもない制度である。

その最上段、輝かしく見えなくもない1という数字の横に

「今回も、か。まるで出来レースだな」

それがさも当然といわんばかりに小波 優という文字がプリントされてきた。

第1話 同級生

本日のカリキュラムすべての終了を告げるチャイムが鳴り、
苦行を終えた学生たちはすぐさま席を立つ。

ある者は部活動、ある者は友人同士で街に繰り出す計画を立てていたり。

さて、どこかによって帰るのも悪くはない、そんな気分だ。

ついでに五反田も誘ってみよう。

そう思って辺りを見渡してみたものの見当たらない。

内心で舌打ちする。

いなくてもいいときにこのこしゃしゃり出てくるくせにこちらから
アクションをかけようとすればこれだ。

なんとかみ合わないことが。

些細なことに少々の苛立ちを覚え、何気なく歯噛みする。

そんな折に話しかけてきた人物は非常に間が悪かったといえよう。

事実俺の対応は褒められたものではなく

。

「か、角川くん。」

「何だ。今俺は忙しい。」

半ば反射で声の主を確認せず応答。

同時に思索をめぐらせる。授業は終わったばかり。

いくら五反田といえどまだそう遠くにはいっていないはず。

追ってみるか？

「その、ちょっと、伝言があるんだけど……」

「何だ」

思考を邪魔されてついつい物言いがきつくなってしまう。

ゆるる両天秤。

五反田を追いかけてまで街に繰り出す気分か否か。

悩みどころであるがゆえ答えに窮する。

「えーと、五反田くんが自分の代わりに角川くんが掃除してくれる

っていつていたんだけど、本当？」

「……」

伏せていた顔を上げて目の前に立っている声の主を確認する。

小柄な女子だ。髪は肩につくくらいのショートカット。

視線はうつむきがちで華奢な体軀もあいまって全体的に弱々しい
雰囲気醸しだしている。

近年は〴〵系という言い方が流行っているがそれに当てはめるならば
小動物系という言い方が一番しっくりくる。

クラスメイトであることは間違いないのだろうが、いかんせん俺は
クラスの人間に興味がなく、交流もないためにクラスメイトの名前
はろく

に覚えていない。

だが名前を覚えていずとも会話は成立するもので……

「いや、そんな話は聞いていないな。五反田に任された覚えはない」

「あ、そうなんだ」

それを聞いてあからさまにシユンと落ち込む目の前の女子。

その姿に思わず憐憫の情を抱きそうになる。

それくらいの薄幸そうな雰囲気を目の前の女子は醸しだしていた。

いかにも貧乏くじを引いて生きていそうなそんな印象。

何もしていないはずなのに何故か湧き上がってきそうになる

罪悪感を押さえ込む。

「用はそれだけか？なら、俺は帰るぞ。」

「あつ、うん引き止めてゴメンね、角川くん。」

もとより返答を待つつもりはない。

目の前の女子が何か言い終わる前にカバンを手にして席を立ち横を

通り過ぎる。

決めた。

もとより五反田がいなければならぬ用があるわけでもない。

誘おうと思ったのは単なる気まぐれだ。

一人で街をぶらつくことにしよう。

「おっ」

「あつ」

街に繰り出す前に俺は校内の図書室に寄っていた。

図書館ほどとはいえないものの、学校の図書室にも割りあい豊富な図書が揃っているもので、俺はよくこの学校の図書室を利用している。

今も読み終わった本を返却して新しい本を借りてきたところだ。

図書室を出て昇降口に向かう五反田と偶然鉢合わせたのはそんな折だった。

そこからはほとんど思考するまでもなく体が反射的に動き、気づけば逃げ出そうとしていた五反田の襟首を引っつかんでいた。

「どうして逃げるんだ、五反田？」

「ち、違う！俺は何もしていない！」

「何もしていないなら逃げる必要はないだろう」

「俺はお前を売ったりなんか断じてしてねえ！」

「……きもちのいい自白をどうもありがとう。」

「だ、だからやってねえって！」

「あー、分かった分かった。一応言い訳は聞いてやるから、いつてみる。」

五反田の襟首をしっかりと掴んだまま下駄箱から外履きを取り出して履き替える。

器用なことに五反田も襟首をつかまれた姿勢のまま首をすくめて高さ

調節をしながら下駄箱から靴を取り出す。

……傍から見ればたいそう奇妙な光景に見えたことだろう。

男二人がくつついて靴を履き変えているこの光景は。

履き替えて玄関を出る。流石にゼロ距離でくつついて歩きたくはない。

男二人ではむさくるしいことこの上ないので、逃げないよう釘を刺しつつ五反田の襟首から

手を離してやる。

五反田が口を開いて自白を始めた。

「でな、七音、お前を売ったのはな……」

「ほう」

「違う！間違った！今は単なるいい間違え！」

まあ、俺はこいつが黒だと知っているのでもまさらどう弁解しようが

一向に気にしないのだがそれでも弁解の第一声が罪の告白とはいかがなもの

だろうか。

ジト目でにらむ俺を前に五反田は大きく咳払いをひとつして仕切りなおす。

「ウオッホン。えーとだな。まず授業が終わって俺はすぐに教室を出ようと

したわけだ。その速度、まさに電光石火のごとく！

俺の通った道には稲妻が閃いたもんさ。

だが、そんな俺に追いつく影が一つ。なんと委員長ではあるまいか。

女子の身でありながらその身のこなしも電光石火。瞬く間に俺は追いつかれたよ」

「……電光石火で動く女子高生とはいかがなものか。」

委員長。俺に話しかけてきた女子のことだろうか。

「そして！捕まえた俺に委員長ー！ーあー、委員長つていちいちいうのも

微妙だな。えーと不二家がな、こういつたんだ。

掃除をちゃんとして、と。俺の体を電光石火の衝撃が走りぬけたよ。

」

「好きな、電光石火」

「で、だ。俺はそこで咄嗟に言い訳を考えついた。

俺の虹色の脳細胞フル回転」

「幸せそうな思考回路だな」

「大事な用があるから今日だけは無理なんだっていったら不二家がじゃあしかたないって折れてくれたんだよ。

フフ、我ながら自分の言い訳作りの才能に恐れを抱いちまったぜ。」

「なら、どうして今ここで俺の追及を受けているんだらうなあ。」

「でもな、言い訳はうまくいったんだけどよ。でもその後の不二家がなんていうか、不憫だよ。

思わず七音のことが口からついててな、いっちゃったんだよ。

そういやあ七音に頼んであるんだって。やー、はは、俺、いいやつ」

五反田がポリポリと照れたように後頭部をかく。

……抑える。まずは話を最後まで聞こうじゃないか。

「けどな、そんな俺がまっすぐ帰ろうとしたのによ、

運悪くウッチーに見つかっちまってなあ。」

ウッチーとは宇都宮教諭のことだ。担当教科は数学。

俺たちのクラス担任でもある。五反田の成績は推して知るべし。

故に五反田はしっかりと宇都宮教諭にマークされている。

このように補習と臨時課題が追加されるのも割合いつものことだ。

「んで、職員室に連行されて前のテストの補習プリントこんなん。」

そういつてカバンから取り出したるは厚みのある20枚ほどの

B5のプリントの束。

補習のプリントというからにはあらゆる教科の最低限かつ最重要の知識が

ぎっしり書き込まれているに違いない。

それすなわち宇都宮の愛といっても過言ではないだろう。

「……………それで？」

「ん？後はそのまま玄関に向かって七音と鉢合わせて今って感じだけど？」

「で？」

「いや、で？、って他に話すことなんかあったっけ？」

「俺をお前が言うところの仕方なくかつ断腸の思いで売り払った理由とは？」

「あ、あー、あーあー……………」

「……………判決は有罪でいいか？」

「異議あり！」

「却下する…！」

両手はグー。それでもって五反田の両こめかみを固定。断罪。

「……………ツツツ。ぐあああああ……………ツツツ……………！」

最初こそ声をこらえようとしていたもののそれはほんの数秒もたず、口から地獄のそこから響き渡っているといっても違和感のない断末

魔の

叫び声をあげて五反田が悶絶する。

俗にいうグリグリである。力の弱い人間でもアラ不思議。

最小の力でも最高の痛みを引き出せます。

それにしても五反田の苦しみ方は予想外でもあまりにも声が大きいの

だから周囲に人がいないか反射的に気を回す。

こんな状況を見られてならない誤解を受けたくはない。

そんな風に辺りを見回していると俺たちの教室が目にとまった。

何か動いている。

まだ人が残っているのか？注意してみるとそれは先ほど俺に話しかけてきた

女子だった。

教室の端から端。

女子の細腕ではやはりそれは重いのかえっちらおっちらといった様子で机を運んでいる。

掃除をし

ているのか……？遊びであんなことをしているわけではあるまい。

今の今まで何往復も何往復も。

先ほど見たときの印象に違わずどうやら本当に貧乏くじをひく人間であつたらしい。

ふむ。よく考えれば責任の一端は掃除をサボつた五反田にもあるわけだ。

俺が自分で刑を執行するのもやぶさかではないが、もっと適した方法があるじゃないか。

「……五反田、お前の刑が決定したぞ。」

「い、今のが、刑じゃ、な、かつた、だと……！？」

息も絶え絶えの憔悴しきつた五反田を歩くよう促し今来た道に戻る。

目には目を、齒には齒をかの古代文明の法典の有名な一説だ。

何をさせるつもりか、などここまで言えば後は説明するま

でもないことと思うので説明は割愛する。

教室の前、ドアの数歩手前まで来て俺たちは立ち尽くしている。

教室の中からは見ようとしないうり見えない場所。

教室内からはせつせと机を運ぶ物音がする。

こっそり中をうかがってみればどうやら委員長こと不二家一人だった
というのは俺の見間違いだったらしい。

物音は二つ。

少し驚いたことに、それは昼間見かけた校内でも一、二を争う有名な
人と

いっても過言ではない、小波 優だった。

「えーと、小波さん。手伝ってくれてありがとね。」

「……………ああ」

「小波さん、放課後に用事とかなかったの？迷惑じゃなかった？」

「……………ああ」

「そ、そっかあ」

アハハ、と苦笑いしつつ言葉を濁す不二家。このやり取りを見ただけ
で

俺は今までどういいうやり取りがされてきたのか軽く理解できた。

場を和ませようと努力する不二家。

対して小波は無愛想に、見ようによってはめんどくさそうに応答。

結果的に不二家の努力は空回り。

それに無意識のうちに力関係も構築されているのではないだろうか。

「こ、小波さん。その机運び終わったら……」

本人にその気はないのかもしれないが傍から見ている分にはジロリと

いった表現がしっくりくる、そんな目つきで小波は机を持ったまま

立ち止まって不二家を見やった。

「ええと、やっぱり掃き掃除私がやっておくね……」

完全に小波の立ち位置が不二家を上回っている。

あれは果たして素でやっているのだろうか。

ある意味一本筋の通った生き方だといえなくもない。

中の様子を伺ってから、なおも躊躇して教室にはいるうとしない

五反田を叱咤する。

「なあ、七音よ。本当に行かなきゃ駄目か？」

「ここまできて怖気づくこともないだろう。そもそもお前の時いた種だ。」

拒否権はない。」

「なんていって入ればいいんだよ」

「そんなものはなんだっていいだろう。それくらい自分の言葉で考えろ」

「ぐぬぬ……」

突き放すような俺の言葉に齒軋りする五反田。

やがて覚悟を決めたのか勢いよく教室に入っていった。

俺も後に続いて入っていく。

「あれ、五反田さんと角川くん？どうしたの？」

「お、おう、そ、その、だな……。き、今日は天気がいいなあ！」

「え？う、うん、そうだね？」

不二家が突然のことによってどうしていいかわからないけれども

とりあえず反応をしておこうとでもいう風にきょとんとし

つつも律儀に五反田の相手をする。

「っ……。だ、だから……」

なおもいいあぐねる五反田。

一度嘘をついたことで話しくくなっているのか歯切れが非常に悪い。

……しょうがない。このままでは話が進まない。

助け舟の一つでも出してやろう。善意ではない。決して。

これはあくまで俺の欲求を、五反田に俺を謀った罰を与えるためなのだ。

と、内心でつぶやく。

「今のを要約するとな、掃除をサボってすみません、だな。」

「え、でも五反田くんは大事な用事があったんだよね？」

「いや、それは――」

五反田が口を開きかける。

随分と遅いものだがようやく自分で罪を白状する気になったらしいが、機先を制するように目の前の女子――不二家といったか――

ーが

閃いたといった様子で笑顔になる。

「そっかあ。ここにいるってことは用事が終わったんだ。

それで掃除の事思い出して手伝いにきてくれたの？。嬉しいな。えへへ」

……………バカか、こいつは。

思わず口をついてでそうになる言葉をのど元でどうにか飲み込み、内心で

そのバカさ加減にあきれ返る。まず疑うべきは目の前の人間が嘘を
ついていた

という可能性だろう。

いや分かっていて見逃した、あるいは今もその前提が成り立っている上で追及を

避けているという可能性もある。

だが目の前の女子はそんな狡猾なタイプにはとても見えない。

人をだますというポジションから遠く離れたバカがつきそうなほどの正直なタイプだ

と思う。

もっとも人は見かけによらない。

目の前の不二家という女子についてろくすっぽ知っているわけでもない。

そんな不二家という人間について混乱しつつも状況は進行する。

不二家の都合のいいとれる解釈。

五反田はそれを不二家の優しさと受け取ったらしい。

何故か妙に気合の入った様子で

「あ、ああ！実はそうなんだよ！やあ、やっぱり誰かに掃除を

押し付けるってのはいけねえよな、うん！」

澆刺として掃除にとりかかった。

五反田の台詞が若干勘に触ったがそれはこの際だ。

無視してやることにする。

「俺、何すればいい!？」

「じゃあ、小波さんと一緒に机を運んでくれるかな？」

「おっけええい！」

小波 優は俺たちが教室に入ってきたのもまったく気にせず

ただ淡々と机を運び続けていた。

まるで俺たちのことなど関係ないと言外にほのめかしているかのようだ。

掃除が再開されて俄かに教室が活気付く。

1人より2人、2人より3人。

不二家について考えていた思考を振り払い3人の掃除する様子を

教壇に腰掛けて眺める。

何気なく教卓の上から手に取ったクラス名簿。

中を開いて一つの名を探す。

探すといってもそれは探すというほど手間のかかるものではなかった。

不二家 千代子。

名前の横には赤い印。

それはおそらくクラス委員であることの証明か。

クラス委員、ね。

責任の伴う割りに大した利益も見出せない役職だ。

これを担う人間は正に貧乏くじを引いたといってもいいのではないか。

自分からやると言い出す人間はよっぽどのお人よしくらいしかいないだろう。

金を積まれてもしない限り俺にはとてもやろうとは思えないな。

「え、えと、か、角川くん。」

「ん？」

いつの間に立っていたのだろう。目の前には自在箒を持った不二家がいた。

なんとなく自分が今まで不二家の欄を見ていたことを見抜かれているので

はないか、そんな少しばかり後ろめたいような気持ちになりつつクラス名簿

をパタリと閉じる。

「も、もしよかったら……、ほんとにもしよかったらでいいんだよ？」

その……、角川くんも掃除手伝ってくれないかなあ、なんて……」

「いやだ」

上目遣いで頼んでくる不二家の言葉を俺は最後まで聞くことなく即答。拒否。

なぜ当番に割り当てられてもいないのに掃除を手伝わなければならないのか。

そんなものはボランティアと同義で、更にいうなら一銭の足しにもなら

ないボランティアというものが俺は大嫌いだ。

絶対にやりたくはない。

「そ、そっかあ……」

萎れた花のごとく、瞬く間に浮かんでいた笑顔は消え去り、

シユンというのがぴったりな様子落ち込む不二家。

その哀愁漂う姿が俺の胸を刺激する。……ああ、五反田の言っていたことが

少し分かるような気がする。

立ち去るその不二家の背中を見ていると俺は罪悪感を抱かずにはいられなかった。

五反田と小波に混じって再び掃除を再会する不二家。

しかし負のオーラはそのまま、先ほどまでシャンと伸びていた背中
中は
すっかり丸くなり周囲の空気が湿っているような錯覚さえ起こさせ
る。

それだけでも十分見ている人間を不快にさせるが、極めつけは――
ザッ、ザッ、チラッ。ザッ、ザッ、チラッ。

数掃きするたびに諦めきれないといった様子の視線をこちらに送っ
てくるのだ。

気にすることはない。

無理やり自分に言い聞かせて無視を決め込む事にする。

何となく視線を外し、そっぽを向いてしまっ。

「……………」

ザッ、チラッ、ザッ、チラッ、ザッ、チラッ。

「……………ツツツ。はあ……………ツツツ」

深いため息をひとつついて重い腰を上げ、掃き掃除をしている不
二
家の

近場の机に手をかける

「貸し一つだぞ。」

「え、あ……、うん！ありがとう、角川くん！」

萎れた花はどこへやら。

花はすっかり元気を取り戻して満開に。

そう思えるくらいの笑顔を不二家は俺に向けた。

よほどご機嫌だったのか、その後の掃除の最中も不二家の笑顔は影をひそめる

ことはなく、小さな声で鼻歌まで歌い出す始末だった。

たかが掃除を手伝うとたったただでここまで喜ぶとは安い人間だ。

そう考えつつもほんの少しだけこんな笑顔を見れるならば手伝う甲斐が少しはあったかもしれないなどと、不覚にもそう考えてしまったのだった。

第1話 人妻喫茶の同級生？

「ありがとうございますー」

店員の声を背に自動ドアをくぐって書店を後にする。

腕には書籍の入った茶色い紙袋。

今日は特に買い物をする予定はなかったのだが前から欲しかった本を偶然

見つけたためについ衝動買いしてしまった。

よく本を読む俺にとって書店めぐりは一種の趣味のよつなものと

化してしまっている。

一冊手にとつては内容を吟味。

棚に戻しては次の本を手に取り。

時間の流れを忘れることもしばしばある。

今回もその例に漏れなかったらしい。

気づけば太陽は傾きかけ、西の山にその姿を隠しかけている。

街はすっかり朱色に染まり、黄昏という言葉で飾るにふさわしいそんな風景。

それらをバックグラウンドに家路へと急ぐ人々や車が忙しく道を
行き交う。

遠くで苛立ったような甲高いクラクションの音が響き渡っている。

その音も人々の作り出す雑踏にかき消され、やがて溶けていき、そ
こに

車のエンジン音が混じりあう。

そこにまた種々雑多なサウンド、あるいはノイズが自己主張を始め
て音の

奔流が出来上がる。

そして出来上がったのがこの「街」。

……などというのは少し格好つけすぎなのだろうな。

自分の頭に浮かんだポエムじみた目の前の光景の描写を恥とともに
きれいさっぱり

切り捨てる。反省。

すぐさま思考を切り替える。

さて、この帰宅ラッシュの流れにもまれて家路に着くというのは正
直勘弁

願いたいところだ。

文字通り物理的な意味での社会の荒波。

よほど遅くならなければ帰宅時間に制限があるわけでもないどこかで時間を

つぶすのが得策だろう。

そんな俺の思考に申し合わせたかのように道を歩く俺の目に止まったのは一つの

小さな喫茶店。

とはいえ個人経営ではなさそうで看板に記名されていたのは全国チェーンで

展開している有名店の名であった。

ふむ、当たりというわけではないがまあ無難なところだ。

外れはないだろう。対面の歩道沿いにあるその店に向かうべく信号が赤から青

へと変わるのを待つ。

タイミングがよかったのか、さして時間をおかず、発光ダイオードが鮮や

かな赤から青へとその色を変える。

同時になりだすカツコウの音。

横断歩道前で待機していた人々の足がいつせいに動き出す。

歩道の真ん中当たりで交じり合う2つの集団。

その対面集団の一人の男がなぜか目についた。

集団から頭が少々出張った大きな目の身長。明らかに染めているであろう

人工色と一目で分かる短く刈り込んだ金髪。

肌の浅黒さと相まってそれがコントラストを生み出している。

そして何より目があったのは背中に背負った底の深い半円形取っ手
つきの鉄器。

「……………中華なべ？」

通り過ぎた後で振り向いて確認する。

はて？今、この時代において中華なべを背負って外出。

料理修行の一環か何かだろうか。

しかし服装は上半身にアロハシャツ一枚。

下半身にだぼついたズボンと、とても料理人には見えない風貌だ。

どうにもぬぐえない違和に首を傾げつつもそれはほんの一瞬のこと
とでそれはすぐに頭の隅へと追いやられた。

人の流れに乗り歩を進めて目的地に到着。

自然な流れで俺はその集団から外れて店の前に立つ。

思わず一つ息をついてしまう。

多くの人に囲まれるというのはそれだけで体力を消耗する。

そんな風にして顔を下に向けると鈍く光るチェーンのついた

プレートが落ちていた。

両面に英文字。それぞれOPEN、CLOSE。それだけで合点がいく。

ああ、これはこの店の開店板か。ドアのところにあるフック部分。

そこから何かの拍子に落ちてしまったのだろう。

俺はそれを拾い、なんでもない風にプレートをOPENの方を外に向けるように

してかけなおす。

そのまま小洒落た細工の施されたドアノブに手をかけて中へと入る。

涼しげな鈴の音がドアの開閉とともに店内に響き渡った。

そして奥のほうから聞こえてくる店員の声。

しかしそれは客を出迎えるには似つかわしくない言葉で――――
！。

「あ、おかえりなさい。早かったですね。」

……おかえりなさい？はて？俺は普通の喫茶店に入ったはずだが
実はここは特殊趣味の人間が訪れる特殊空間だったのだろうか。

白黒エプロンドレスにヘッドドレスを頭に載せた件の職種が頭
に浮かぶ。……いや、待てよ。末尾に早かったですね？

繋げて整理し、吟味してみればこの台詞、どこかで聞いたことが
あるような台詞であると引っかかりを覚えた数瞬後。

……ああ、これは仕事に疲れた旦那を迎え入れる妻の台詞だと
いうことに気づく。

ではここはメイド喫茶ではなく……。――――結論。

「人妻喫茶」

……えろくない？

…

……

……

……

……

……殺せ。あまりにも馬鹿馬鹿しい考えにいたった自分が恥ずかしい。

馬鹿か、俺は。そんなこと！、あるわけが！、ないだろう！。

胸の内で嘆息して自分を戒める。反省。しかし落ち着く暇もなく

驚愕は向こうから小走りでやって来た。

今まで水仕事でもしていたのか首から下げたエプロンの裾で

手を拭きながら店員が奥から出てくる。

「あ、ごめんなさい。今まで洗い物してて手が離せなく、て……」

「……不二家？」

「……か、角、川くん？」

奥のキッチンらしき場所から出てきた店員は俺の見知った顔で――
――というより

も数時間前まで付き合わせていた顔だった。

俺は当然驚いたが、それは不二家も同じようで、水仕事でぬれた手を首から

下げたエプロンでぬぐう体勢のまま、固まっていた。

……いや、このまま固まってもしょうがない。

頭を切り替える角川 七音。ものの数瞬でリセット、再起動。

不二家は動かない。

ならば俺から動くしかあるまい。一つ咳払いをしてから俺は会話の
イニシアチブを握る。

「……お客様1名様ご来店なわけだが」

「あ……、は、はい！」

第1話 敵、小波、能力

「ごめんね、角川くん。今店長さんいないからこんなものしか出せないの」

「いや、別にかまわない。それより不二家はここでバイトしているのか？」

通されたカウンター席に座って不二家に出されたコーヒーをすする。

どこにでもあるチェーン店のほどほどに渋くしてみましたといった既製品っぽい味。

「うん、1年生の頃からお世話になってるの。」

私ね、どんくさくてよく色々な失敗して怒られちゃうんだけど

それでもやめたいって思うほどいやじゃなくてね、

店長さんはすごくよくしてくれてるよ。」

俺にとって今日日知り合ったばかりの女子と会話するのは

なんともいえない忌避感があったがそれでもなんとなく黙っているのも

どうかと思いい話題を振る。

それにしても今日はもう一日一人でいたいと思っていたのだがその

矢先に

これとは今日は新しい出会いだとかそういつものにもぐり
合つ日と、そういつことなのだろうか。

別に知り合いが欲しいとも思わないので正直迷惑極まりない話では
ある。

「ふーん、まあ俺には関係ない話なわけだが」

「あ、ごめんね。自分語りみたいなことしちゃって。

うっとうしいよね、こつこつ」

「ああ」

「そ、そうだよ。ごめんね。」

「そういつすぐに謝る卑屈な所がよりいっそう。」

「あつ……………」

体に押しつけるように盆を両手で持った不二家がうつむいてシュン、
と

いった表情をする。

この程度の言葉で落ち込むとは何とも打たれ弱い。

ある意味純粹とも呼べる。

それは傍から見れば恐らくは利点の一つに数えられるのかもしれないが

生きていくのには苦勞しそうな性格だ。

いつもの俺の分析癖が出てまだ情報の少ない不二家という人間についての分析を始めてしまう。

「で、その店長さんとやらの姿が見当たらないがどうしたんだ？」

「うん、今ねちょっと発注に手違いがあつてその対応に出かけてるの」

「それで不二家は今店に一人というわけか。とはいえバイト一人に店を任せるといふのはどうなんだ。作れるメニューは限られるんだろっ？」

「うん、それで店長さんにいわれて帰ってくるまでは表のプレートをクローズにしてたはずなんだけど……」

「……ああ、ああ、そういうこと。そういうことか。」

そうか、今まで看板がクローズになっていたから今この店には俺以外の客

がないのか。

外があんなに混み合っているのに客がないものだからってきり売っていないものかと。

それで不二家の出会いがしらのセリフはその店長が帰って来たものだ
だと

勘違いしたというわけだ。

「表のプレート、落ちてたぞ」

「え？そうなの？それで角川くんが入ってきちゃったんだ……。」

じゃあかけ直しにいかないとー……」

「それで俺がかけ直しておいた」

「あ、ありがとう。」

「オープンに」

「え、えーっ！」

俺がひとこというごとに不二家の表情がころころと変化を見せる。

慌てたあとに安堵の表情。

かと思えばその顔が焦りを見せる。

仕草がいちいち小動物じみている。

……いかん、少し面白いと思ってしまった。

調子に乗った自分を悪いとは思いつつもさらに拍車がかつてもう一言つけたしてしまう。

「早く直さないと次の客が来てしまつかもしれないなあ」

「そんなの困るよお……」

今度は落胆。

俺が何か言ったたびに不二家の反応が変わる。

……楽しい、実に楽しいなあ、これは。

心の底から湧きあがってくる征服欲が満たされていく。

まるで操り人形を操っているようじゃないか。

さながら不二家は俺というドールハウスのキャストの一人。これは
！、実に！、いい！

フフ、ハハーハッハッハッ！ハッハッハッハッハッハッ！！

…

……

.....
.....
.....
死ねよ、俺は。途端自己嫌悪に苛まれる。

決して口と表情に出しはしないものの自分の考えていたことのおぞましさに寒気が走った。

心の内で四つん這いになってうつむく。

気持ち悪いな、俺。反省。その意もこめて俺は椅子から立ち上がる。

「ちょっと表の看板かけ直してくる」

返事を待たず飲みかけのコーヒーカップを置いて立ち上がる。

モダンな雰囲気の漂う店内。

歩きたびに木製の床が小気味いい足音を生み出す。

そして俺が店の小洒落た装飾の施されたドアの取っ手に手をかけた時だった。

ドゴオン！と形容するにふさわしい耳をつんざく破壊音。

まるで雷が落ちたような。

爆弾でも爆発したような。

驚きに動かしかけていた手が止まる。

「きゃっ！な、なに？」

ビクリ、と不二家が肩を震わせる。全うな常人の反応。

性格ゆえか、その表情には若干の恐怖も入り混じっている。

そして事態はそんな驚愕する暇も満足には与えてくれない。

俺が手をかけようとしていた木製の扉。

細部まで施された装飾。

認識は一瞬だった。

装飾を引き裂くようにして穴を穿ち、『何か』が突き出してくる。

それは俺の首筋を掠めてブレザーの襟を引き裂いた。

宙を舞う襟だった布切れとそこに引っ付いていたクラス章。

扉を突き破った物体は店の壁に突き刺さりようやくその勢いをとめる。

俺の首の横を通っているそれを見やる。

それは鈍い光を放つ鉄杭だった。

カウンターの壁に突き刺さっていた鉄杭がズボリと抜けてシユルシユルと元きた道を

辿って店外へとその姿を消していく。

被害を受けた壁と扉からパラパラと破片が床に落ちていく。

————それはきつと日常の壊れる瞬間。

「あ……………」

「不二家っ！」

力なく倒れるその不二家の体を咄嗟に駆け寄って支える。

その落下速度を緩めるようにして不二家の体を床に横たえる。

あまりに突然の出来事にショックで気を失ってしまったのだろう。

位置取りが悪ければ命を落としていたかも知れない状況だ。

それも詮無いことだとも思う。

窓越しに外の状況を垣間見る。

窓のすぐ近くを慌しい足音と悲鳴とともに人が駆け抜けていった。

そんな状況下で立ち止まってその場を動かこうとしない人影が一つ。

その男は鈍い光を放つ中華なべを背負っていた。

しかしそれははたして本当に中華なべだっただろうか。

中華なべっぽく見えるそれは所々が出張っていて半円の形を半ば失っていた。

だがそれも少しの間のことやがて突起は引っ込んで元の形を取り戻す。

とても普通のなべではない。

だが、俺は直感する。なべが異常なのではない、使う人間が異常なのだ。

異能力者あるいは超能力者。天の与えし凡夫とは一線を画す力。

男が行使しているのは正にその力だ。力を持たぬ人々は逃げ惑うことしかできない。

さながら今のあの男は狩人。

男は獲物に視線を向けて不敵に笑う。

中華なべがグネグネと生き物のようにその形状を変え始めた。

来る！先ほどの攻撃が。逃げなければ！

そうわかってはいるものの俺はその場を動けない。

俺一人ならば物陰に隠れてやり過ごせるのだから倒れている不二家を

一緒に動かすことはできない。これがネック。

ならば見捨てるか？選択肢として浮かんできた意見の一つ。

ありかもしれない。だがそんなことはありえない。後味が悪い。

フーッと一息を吐く。次の攻撃まで後数秒もない。

その間にこの状況の切り抜け方をシミュレートする。

相手は能力者。おもしろい、やってやろうじゃないか。

目撃者はいない。なればこそ好都合。

そして俺は道路に面した入り口側の壁に駆け寄って壁に手を触れる。

窓からチラリと覗く中華鍋を背負った男の次打を放つモーション。

合わせてカウントファイブ。5、4、3、2、1 0！

直後、予想していた衝撃が店を揺らした。

ガタガタと棚にしまわれていた食器類が物音を立て、天井から釣り下がっている

電灯が大きくグラインドした。

しかし、それだけ。鉄の杭は壁に穴を穿たない。穿てない。

先ほどはやすやすと貫いたその壁に今度は進路を阻まれていた。

敵との距離、約200m。

その結果で満足してはならない。

俺はすぐさま壁際から離れて店の奥にある厨房へと駆け込んでガス
コン

口へと駆け寄る。

目的は火の元、ガス栓。

そのコックを捻りその後で取り付いているチューブを力づくで引っ
こ抜く。

音は立たないものの途端に周囲一帯にガスが充満していき見えない
毒が散

布されていく。

その証拠に気体の放つ異臭が途端に鼻をついた。

別のガス栓も同様に引っこ抜く。俺の予想通りならーー。

シミュレートした思考を辿る。貫くはずの壁が貫けない。

そして疑うのは能力者の可能性。

能力者にとって能力者というものはある種の脅威といえる。

一般人とどちらを先に仕留めるかなどの優先順位は比べるべくもない。

そうならばあの男はその可能性を秘めたここへやってくる。

なれば相応の準備はしておかなければならない。

生憎と俺にはたいした戦闘能力は備わっていない。

だがそれでも創意工夫を凝らした自分の頭があればあらゆる状況を

切り抜ける自信はあった。

今回だって例外ではない。

いかんせん切り抜けるピースが若干心もとないがだからこそ自分の能力が

試されるといふもの。

弘法は筆を選ばない。

カウンターレジ横のスペースから売り物であろうライターを一つ抜き取る。

厨房で空き瓶とサラダ油を手取る。

そしてビンの中にサラダ油を投入。

口に布をつめて、即席火炎瓶の完成だ。

そのとき入り口の方から二度衝撃。

硬い物質がぶつかり合う粗野で乱暴な音。予想通り男はここに向かってきた。

扉に壁に騒々しく何かをたたきつける音が店内に響く。

徐々に大きくなりつつある打撃音が男のストレスのたまり具合を

如実に表している。

……そろそろ頃合か。

厨房から離れた窓際の客席ですらガスの匂いを感じ取れる。

これ以上ここにいと俺自身も危ない。

床に横たわった不二家の体を背負う。

手には即席の火炎瓶。

入り口から90度に取り付けられた人が通るには十分な大きさの横
開き窓に

に手をかけて鍵を開ける。

そして俺は自らの持つ忌々しい異能力を再び行使した。

ハーデイス
「硬化、解除」

壁伝いに表通り側の壁に行使していた力を解除する。

瞬間店の壁が轟音とともに破られ中に強引に入ってくる男の姿が見えた。

しかしそれも一瞬で俺は窓の棧に足をかけて不二家を背負ったまま入れ違いに店を飛び出す。

スタツと地面に着地した後でたつた今出てきた店の窓に振り向き、ボツ、と俺はライターの火をつけて持っていた即席火炎瓶に点火する。

勢いよく開いた窓が反動で再び閉じていく。

その隙間に紛れ込ませるように俺は軽く点火済みの勢いよく燃え盛る火炎瓶

を放ってやった。

「吹き飛ばす」

窓がゆっくりと閉じていく。両端が触れ合い、窓が閉じきった。

瞬間。ポオン！、と見た目にも派手な爆発が巻き起こった。

爆風と爆炎、併せ持った熱風が俺の体に吹き付ける。

壊れた椅子や机の木片が辺りに散らばる。

大き目の破片がカランという乾いた音を立てて俺の足元に転がってきた。

濛々と立ち込める煙と燃え盛る炎。中は惨状というにふさわしい目も当てられない状況になっているに違いない。

これは人を傷つける術。下手すれば死。

しかし、爆発というのはナイフによる刺突や毒殺などと比べれば

死ぬ確率はグッと下がる。あくまでそれらに比べて、だが。

それでも危険なものであることに変わりはない。

それでも俺はこの判断に間違いはないと頑なに自分を曲げない。

……俺自身が生き残るためならば他人すら踏み台にする。それがポリシーだ。

そのためならばどんな手段でも行使しよう。

一つの店を爆破する。

これは犯罪に値するのだろつが緊急事態といつこととでどつか目を瞑つて欲し

いと心の中で誰とも知れない人物に言い訳をする。

俺はこんなところで死ぬつもりはないのだから。思考をすぐさま切り替える。

さて、次の逃走経路だ。

爆破はうまくいったもののこれで能力者一人を仕留められるとはとても

思えない。そしてその予測は過たず。

燃え盛る焰と立ち込める煙の向こう、ゆらりと立ち上がる男の影があった。

逃走経路、とはいったものの実際に逃げ回るのは厳しい。

こちらには怪我人（不二家）というハンディキャップがある。

ならばすることは――――

「時間稼ぎ、だな」

独立治安維持組織ゴスペル。彼らは能力者の関連する事件を担当する組織だ。

これだけ大規模な騒ぎならば通報を受けてもうじき到着してもおかしくない頃合だ。

……となるともう一手か二手打つ必要があるか。

そんなことを考えている間に男は完全に体制を立て直していた。

「よくもオ、」

沸々と煮えたぎる激情がその少し掠れたような声から感じられた。

地底の底で渦を巻くマグマ。

「やってくれたナア！！コンチクシヨウガアア！！」

活火山のごとくそのマグマは解き放たれ、品性のない罵倒と化して俺へと向けられる。

生の人の怒りに触れビクリと身を竦ませる。

しかし同時に俺の冷静な部分が分析を開始してホッと安心する。

こいつは激情型。もっとも扱いやすいタイプだ。下手な読みは必要ない。

複数手考えてあった逃げのルートが一気に絞られる。

男が確かな殺意を持って俺のもとに向かってこようとす。

それに合わせて俺も駆け出そうとしたその刹那だった。

「離れる！」

日常生活ではとても聞きなれない、だが、この非日常の場には似つかわしい

銃声が聞こえてきた。

その銃弾は牽制するかのようには俺と男の間に打ち込まれた。

俺のいる喫茶店だった場所の横合いの路地の右方。

銃の主は大通りの方に立っていた。突如現れた闖入者。

凜々しく双銃を構えた瘦躯。

その銃口からは硝煙が吹き出ている。

その人物を認めて今日何度目かの驚きとともにため息をつきたくな
った。

今日はゆくゆく人に出会う日らしい。

その名前を、呟く。

「……………小波、優」

「……………」

小波優は何も語らずただ静かな双眸を携えてそこに佇んでいた。

高校の制服を身にまとい放課後を街中で満喫していたとでもいった
風な

出で立ち。

ただ一つ両の手に持つ凶器だけがそれを否定たらしめる材料。

俺から小波へと移った男の殺意を正面から受け止めても眉ひとつ動
かさない。

怖気づく様子は微塵も見られなかった。

「チツ、テメエが来る前に消しておきたかったんだがナア。スパイ
ラルウ」

「……………」

「だが、それならそれでやりようがあるってもんだよなあ!!」

背負った中華鍋が再び歪にグネグネと動き出す。

それが槍と化して俺のほうに襲い掛かってくる

「くっ」

不二家を背負っている為に体の動きが鈍い。

それでももともと俺のほうに来ると予測出来ていたためか、どうにか

その一撃をしのぎ切る。

槍の先端が俺の左足をかすめて制服とその下の皮膚をわずかに傷付けた。

ひりつくような痛みが全身を駆け抜ける。

槍は俺のもといた位置に斜めに突き刺さっていた。

「……………下衆だな」

「下衆で大いに結構。それでテメエをしとめられるんなら安いもんだぜ、スパイラルウ。何せテメエには結構な額の懸賞金がかかってんだからなア。」

「懸賞金が付くとは私も高く買われたものだな。京樂きやうがく 漁火いさひ」

小波が相手を名指しする。

すると男の方はわずかに眉尻をあげてさも意外なものを見たという表情を浮かべた。

「情報が早えなあ。じゃあ、改めて自己紹介と行こうかア。」

鈍光アイアンスパイクの鉄棘京樂 漁火。愚人教会員NO・89だ。」

「この街に何をしにきた？」

「おおおいおい、俺が名乗ったつてのにそっちは名乗りなしかよ。

ま、べつに知ってるからいいんだけどヨ。

ゴスペル、アラウンズが一角。＜スパイラル＞小波 優。」

ゴスペル。その単語に俺は反応する。

俺達となんら年の変わらない小波優が対能力者組織ゴスペルの一員で

あったこと。

それはひどく意外な事実だった。対能力者を掲げるゴスペル。

そこに属する人々は当然相応の戦闘力を要求される。

一人ひとりが軍人のようなものだ。

自分の身の回りにその軍人が知らず知らずのうちに潜んでいたこと。

これには驚かざるをえないというものだ。

その中でもさらにアラウンズ、ときたか。

「目的イ？そんなの簡単だぜ。いったら？テメエのクビには懸賞金がかかってるって。」

「……………私を狩りにきたか。」

「ああ、テメエをおびき寄せる為にひと騒ぎ起こさせてもらったぜ。

もおつとも？

思わぬイレギュラーも紛れ込んでいたけどナア？」

最後のほうは呆れたように、笑うようにいつて男は、京楽は俺を見やった。

「さてえ？そろそろおつ始めようぜ。」

「……………一般人を逃がす時間はやはりくれん、か」

「生憎そんな倫理を俺は持ち合わせちゃいねえんだよ。」

それにそのクソガキは生意気にも一発デカイのぶち込んでくれたんでナア」

そこで初めて小波が俺に視線を投げかけた。眉をひそめて俺をいぶかしむ。

「……………何をした？」

「単なる正当防衛だ」

自分が生き延びるためにとつた行動だ。責められるいわれはない。

「つーワケで、いくゾ、コルアアアアア！！！！」

「下がれっ！！」

響き渡る京楽の激昂と共に背負った中華なべが変形を始めてそれが

複数本の鉄槍と化する。

あらゆる方向に生えたその槍が一斉に襲い掛かってくる。

合図を受けて俺は小波の後ろまで下がる。

俺たちをかばうような形で前に出た小波が京楽との距離をつめるように駆け出す。

小波の瘦躯が鉄槍の弾幕に突っ込んでいく。

突き刺さんと伸びてくる鉄槍。

その一本が小波の体に触れんとしたとき、小波はバスケの敵をかわすステップのような動きで第一射をやり過ごす。

逃げた方向にさらに向かってくる第二射。身を屈めて過ぎ行く槍の下を

潜り抜ける。

しかし続く攻撃は屈んで体勢の崩れた小波を狙うような地を薙ぐような

下段払い。

それでも踏ん張りを利かせて地から飛び立ち前へと飛ぶ。

だがそれは決定的な隙だ。人は翼を持ち得ない。

空という空間は人間にとってのアウェイだ。

「もらったアア！」

仕留めた、といわんばかりに京楽がニヤリと口元に愉悦の笑みを浮かべる。

京楽の操る槍が一本小波の心臓へと最短距離を走る。

狂気の籠った凶器が空気を切り、血に餓えた獣のようなり声をあげる。

だが小波の表情は一向に崩れない。まるで余裕。

あせった様子は微塵も感じられない。

それが決して強がりではないことは次の瞬間で示される。

槍の突進にタイミングを合わせるようにして横合いから銃をもった左手を

合わせ槍に触れる。

すると、動けないはずのその体がクルリ、と触れている左手を軸にして半回転した。

まるで羽が生えたかのように小波の体は宙を舞った。

前に向かっていた運動エネルギーも相まってその体は螺旋の軌道を

描く。

必中だったはずの一撃を避けられて目を見開いている京楽。

急所を外した位置めがけて小波が発砲する。

しかし、よかったと思うべきなのだろう。

京楽は残っていた中華なべの一部を变形させて即席の盾を作り、銃弾を凌いだ。

甲高い音を立てて鉛弾がいずこかへと飛び去る。

分が悪いと見たか京楽は路地の奥へと後退して体勢を立て直す。

「逃げるぞ」

その隙を突いて小波が京楽から距離をとり、俺を表通りの方へと導いた。

大通りは酷い有様だった。そこに秩序は微塵もあらず、あるのはただ混沌。

少し前までの平和な日常のワンシーンは一体どこへ行ってしまったのか。

つぶね、ひしゃげ、ものいわぬ鉄塊と化した自動車。

崩れかけのビルの外壁。そしてその景色のところどころに人間が転がっていた。

歩道の片隅で建物の壁に背を預ける者、苦痛のうめき声を上げながら地べたを這いずり回る者、

顔は見えずとも瓦礫の下敷きになってピクリとも動かない者。

地獄絵図。

常人が見たならば発狂してもおかしくはない。

しかし幸運なことにそれはごく少数でむしろあれだけ人がいた中でよく

死傷者がこれだけですんだものだと思えるレベルだった。

すでに避難を済ませたためかあたりにまともに動けそうな人は見当たらない。

そんな中でまともに動ける人間は珍しいのだろう。

俺と小波の姿を認めるなり助けを請う声が聞こえてきた。

だが、今はそんなことに構ってはもらえない。

優先順位はまず自分の安全の確保。それ以外は二の次だ。

冷静な思考で冷徹とも取れる判断を下しその声を踏みにじる。

誰だってまず自分がかわいい。

「ここに隠れている。」

小波がつれてきたのはテナントビルの一階部分。

大きいとは決まっていいたいが身を隠すには十分。

電気の非常事態のためか電気の供給が止まっており近づいても自動ドアは機能しない。

閉じたドアを小波が力づくでこじ開ける。

ウウウウツとモーターが無理やり回転する音がした。

「お前はどつするんだ？」

エントランスの冷たい床に気を失った不二家を横たえ、背中越しに小波に問いかける。

「ヤツを抑える。このまま野放しにはできん」

「それがお勤めというわけか」

「……………」

何もいわず小波は最低限の答えだけ返すとその手入れのなっていない

長い髪を翻して再び戦場へと舞い戻っていった。

その姿は勇ましく、凛々しく、とても高校生とは思えないそんな背中だった。

第1話 策、回転、終わり

一応の落ち着きを取り戻したことで状況を整理する。

今自分は事件に巻き込まれている。それはどうやら小波を狙うものであった

らしく、小波をおびき寄せる前段階の無差別攻撃に運悪く巻き込まれた。

別に俺自身、あるいは不二家が狙われたわけではなかったようだ。

そして小波の到着。小波がゴスペルの一員であることには驚かされた。

それは決して口だけではなく、あの場慣れした動きがその信憑性を高めている。

経験と訓練に裏打ちされたそんな動きだったようにに思える。

そんな小波優とそれを狙ってこの街に襲撃をかけてきた京楽 漁火。

今この場にいるのはそんな常人を超越した能力を持つ2人の戦力。

窓ガラス越しに外を覗く。

路地裏から姿を現した京楽が今まさに小波に詰め寄らんとしていた。

「なア、スパイラルウ。オマエが強いのは百も承知だア。だがそれを

知った上で何でオマエに正面から戦いを挑んだと思う?」

京楽の口角がつりあがる。

「それはなア、オマエの能力と俺の能力の相性が限りなくイイと

踏んだからだよオオ!!」

瞬間、爆発するように京楽の中華なべから四方八方に向けて槍が発散した。

すばやい動きで小波は距離をとって回避する。

槍は空ぶった、かに思われた。槍が突き刺さった部分をよくみる。

(すべて鉄ーーーー!)

つぶれた自動車、ひしゃげた街灯、ランプの消えた信号機。

刺さった槍がドクン、と生き物のように脈動する。

それらは次第に形を失い、液体のように溶けていく。

効果範囲は鉄のみのためか、ガラスや、ゴムなどの不純物はその場に残された。

発散した槍が新たな材料を伴い、京楽の元へ戻っていく。

溶けて形を失ったそれらは一つになり京楽を包み込むようにして再

び形を取り戻す。

そうして一つの要塞が出来上がった。

「フルアーマー
鋼鉄要塞。こいつでテメエをぶち殺す！」

外見は西洋風の騎士といった出で立ち。分厚い鉄の装甲が京楽の体を覆っていた。

しかし、騎士なのはあくまで外見だけで中に入っているのは騎士道精神とは

遠くかけ離れた醜い野獣だ。

品のない叫びが鎧の中から聞こえてくる。咆哮を伴って攻撃は再開された。

騎士のよう、とはいうものの、その腕に槍や剣といった武器はない。

もつ必要がないのだろう。なぜなら――

京楽を包む鎧がグネグネと変化を始めて肩口当たりから鋭い槍が数本飛び出す。

全身が武器のようなものなのだから。

飛び出した槍が案の定小波を付けねらう。

当然のように小波はこれかわして前に出る。同時に発砲。

銃弾が京楽に直撃するもやはり微動だにしない。

「無駄無駄無駄アア！そんなチンケな銃じゃあ今の俺は倒せねえヨ
！」

そんなことは小波にも分かっていたことだろう。

眉一つ動かさずひたすら、前に出る。

その動きはスタント張りの動きで当たり前のように襲い来る

すべての鉄槍をかわしていく。

そして時折混じる不自然な小波の動き。

避けられないと確信した攻撃が何度かあったのだが、そのたびに小波の体が

重心や重力といった概念を無視した動きで不思議とそれをかわすのだ。

それが一体何なのか。

最初はわからなかったが何度も見ているうちに俺は一つの仮説を得る。

「回転、か」

不自然な動きを見せるその直前、小波の手は必ずどこかに触れている。

それは建造物の外壁であったり、京楽の放つ槍であったり。

そしてその動きは決まってそこが軸になって手が張り付いたように動かない。

決して自由に空を舞えるわけではない。

どこかしらの軸が必要なのだ。

そしてその軸を自ら作り出し、活用することである三次元的な動きを可能としている。

それが小波の動きのギミックだ。

その動きについていけないためか京楽の攻撃はなかなか当たらず、小波の進撃は

止まらない。

状況は小波が優勢。

互いの距離は見る見る縮まり、重装甲が仇となり、その場から動けない京楽に小波が迫る。

だが、事はそう簡単には収まらなかった。

「ナメンじゃねえ!!!」

放った鉄槍、それがすべて勢いよく中心点たる京楽の元に

ヒュン、とDVDの巻き戻しのように戻っていく。

それらがすべて収まり元の鎧に戻ると同時、今度は全方向に狙いも
つけず見境なく槍が斉射される。

なかなか当たらない攻撃。

それでも数を打てば当たるといわんばかりだそれはハリネズミのよ
うに

周囲に拡散していく。

一本一本は先ほどまでの槍より細いものの、数が圧倒的に多い。

「くっ！」

さすがの小波も全てをかわしきることとはできなかつたらしい。

無数の槍のかわしきれない数本が体に突き刺さる。

腹部に一本。左肩に一本。

うち、左肩に刺さった槍は太く、それに見合う相応の量の血液が噴出
していた。

咄嗟の判断だろうか。

その突き刺さった左肩の槍を引つつかみ無理やり動かし、体ごと後ろに

移動して引き抜く。

痛みをものともしないかのように小波は叫び声をあげなかった。

傷をえぐる痛みは相当なものであった。ただろつに。

しかし、俺の方もそうのんびりと観察している暇はなかった。

京楽の放った無数の槍。

それは俺の潜むビルにも飛んできた。

殺傷力は落ちるものの貫通力はどうやら変わらないらしい。

それは辺りのビルの外壁をやすやすと貫く。

無論、それは俺のいるビルも例外ではなかった。

「っ！硬化！」
ハーデース

反射的に能力を使って辛うじてそれを防ぐ。鉄すら防ぐ壁。

文字通りの鉄壁。

ガキンツという派手な音とともに壁はその攻撃を防ぎきった。

「ナルホドなあ、あのガキはそんな中か。」

…………… チツ、防いだはいいものこちらの位置を捕捉されたか。

内心で舌打ちする。

正直なところ俺はこのまま何もせずにゴスペルの増援が来ることに
期待

していたんだが見つかった以上そうも行かないだろう。

となればベターな選択は打って出て時間稼ぎ。

よりよいベストな選択は倒してしまうこと。

今手元にある材料を考察する。

先ほどとは大きく違う点がひとつ。

(小波 優、か)

これは使える。あの戦闘力だ。

こちらはジョーカーを手に入れたといっても過言ではないだろう。

そして、俺のこの硬化。ハーデイス

カチリ、と歯車がかみ合ったような音が聞こえた。

この場を切り抜けるための最善の式。

それに伴う解が導き出される。

将棋やチェスでいうなら終局間近の詰みまでのルートが見えた状態。

プランは整った。

後はうまく実行に移すのみ。

そんなある種の確信を持ち、俺は意を決してビルの半開きになった自動ドアから外に出る。

「あんだ、本当に見境がないな。襲われるこっちとしてはいい迷惑なんだが。」

「テメエにやあでっかい借りがあっからナア。そう簡単に逃がすわけにはイカネエよ。」

全身ブスブスに穴だらけにしてエ！全身グツチャグチャにしてエ！
体の肉をすり潰してひき肉にしてやんねエと俺の気がスマネエんだ
よおー！」

「……頭の悪そうな発言だな。だから俺にいいように転がされるんだよ。」

「ナニイ！？」

「忠告してやる。捕まりたくなかったら今から豚のように必死で逃

げ回れ。

まだ向かってくるといふのならお前、俺達に倒されるぞ、スクラッシュ鉄屑」

「ッ！クソガキがあ、いわせておけばいいだけいってくれんじやねえのお」

怒り心頭といった様子で京楽はうつむいてなにやら物々呟いている。随分勝手な物言いであったと思う。

先ほどまで逃げてばかりいた人間が突然牙をむくことを宣言したのだから。

そして自分の守るべき対象が突然こんなことをいっては小波が噛み付くのも当然だった。

出血の激しい左肩を抑えて小波がいう。

「……貴様、本気か？これはゲームじゃない。正真正銘の殺し合いだ。

そこに民間人を参加させるなど……」

「小波、お前の能力は物質を回転させることで間違いないな？」

だから二の句を継がせぬよう、小波の言葉を無視して今必要な情報を小波から引き出す。

そして自分の仮説が正しく、作戦に支障がないことを確認する。

「お前のその能力でヤツの鉄槍の軌道を曲げることはできるか？ヤツ自身に向くように」

「だから、人の話をーー」

「今はそんなことをいつている場合じゃない。質問に答える。できるのか、できないのか？」

まるで威圧するかのような傲慢な俺の言葉に小波はやむなく自分の言いたいことを飲み込んだ。

そして俺を冷たい目で一睨み。

「……………できる。あの鉄の槍は先端は硬いものの、中間の部分は常に形を変えるために」

曲がりやすくなっている。

だがそれでヤツ自身を狙ったところで意味はない。

多少のダメージは与えられても決定打とはならないだろう。

ヤツ自身も同じ鉄の鎧で守られているのだからな」

「その決定打を作り出してやる。おそらく次にヤツが狙ってくるのは俺だ。」

その第一撃を狙う。ヤツは槍で俺を狙って来るだろう。

俺がそれを避ける。そうしたら俺が触った槍の方向をヤツに向けて曲げる。いいな？」

「だから、あの槍で鎧を貫くのは不可能だと――」。

「いいから、やれ」

そっぴい切つて俺は前に出る。知らず、冷たい声が出る。

否が応でも従ってもらわねばならない。

これからすることには少なからず俺自身もリスクを背負うのだから。だが、それでいい。

リスクを背負わずしてリターンを得るなど虫がいい。リスクを背負うくらいがちょうどいいのだ。

小波はさぞ困惑していることだろう。素人に根拠もない戦術を提案されてそれをやれ、と。

しかもそいつは一向に話を聞かない捻くれた自分の同級生。

自分でやっておいていつのもどろかと思つが俺ならば殴り倒すレベルだ。

それでもおそらく小波は実行に移すだろう。すでに状況は動き出している。

実行に移さなければ逆に俺の身が危ない。

思うところはありつつも小波は俺のいったことを実行せざるを得ない。

民間人たる俺が危険な前に出る。

民間人を守るために戦っているであろう小波にとってはある種の脅迫だ。

京楽と正面から対峙する。

目の前の京楽の鎧の兜越しに見える目には殺意が迸っていた。

狂気に走り、理性のすっきり壊れた狂人のどす黒く濁った瞳。

「クロス」

その声色は恐ろしく低く、聞くものに恐怖を与えた。

背筋を冷たいものが走り抜ける。

俺が煽った効果があったか、読みどおり京楽は第一射のターゲットに俺を選んだ。

その背中から無数の槍が一斉に解き放たれる。

ホーミングミサイルのようにそれらは全て俺の方へむかってきた。

「覚えておけ、京楽。ゲームでも試合でも殺し合いでも。勝負事全てに出来ることだけだな。」

負ける人間に一番多いのは理性を失って感情が先走るパターンだ。」
その槍の動きは速いもののすべての動きが単調で、あらゆる角度から迫るものの、一様に俺の頭を狙っていた。

「人間と獣の違いは理性があるか否か。」

その程度なら並の運動神経しか持たない俺でもかわすことは見戲にも等しい。

「怒り、理性を失えば人はただの獣と化する」

横に少し移動して軽くそれらをかわす。そのすれ違いざまに不揃いな大きさの

無数の槍の中で大きめの一本の先端に手を触れる。

「そして獣じゃあ、理性を持つ人間には勝てない。」

その一瞬で能力^{チカラ}を行使する。

これが、ヤツの自信と戦力を奪う決定打への布石。

「俺みたいな『人間』からすればお前みたいな直情思考の人間が一番扱いやすいよ。」

打ち合わせどおりに俺の横を通りすぎたはずの槍が軌道を変えて京楽の元へ向かっていく。

小波はどつやらつまくやつてくれたらしい。

よくもまあ、いうことを聞いてくれたものだ。

と一方で思いつつも他方ではまあ緊急事態だから当然か、と異なるもう一つの答えを出す。

「ッ！カウンターだと!？」

突然のことで槍の制御を失ったのか、京楽のもとに向かう槍はその速度を緩めない。

鋭い切っ先は空気を切り裂いて主人に逆らう。

重装甲のために京楽のその体は満足にその場から動けず、受け止めるしかない。

それでも京楽が抱くのは絶対の自信。

「だがなあ、俺が身にまとってるのは同じ鉄だ。そんな俺に鉄の槍が効くわけねえだろうが！」

このマヌーーーーー」

グサリ、と肉が突き破られる音がしたような気がした。

言葉は最後まで形を成しえなかった。鎧をまとった京楽の腹部。

そこには確かに鉄の槍が突き刺さっている。

鎧のわずかな隙間から刺さった槍を伝って血が滴り落ちる。

京楽がその場に両膝をつくその表紙に頭部を覆っていた鉄兜が脱げて
ガラン、と地面に落ちた。

兜の下にあったその顔は信じられないものを見るような目で自らの
腹部を

呆然と眺めている。

「な、なんでだ……」

「そんなことにも気づけないからこういう結果を招くんだ」

理屈は単純。槍の先端を俺が硬化してやっただけだ。

同じ鉄で身を守る自分にそんな攻撃は通じない。

その思い込みがこの失策を招いた。

京楽は俺が能力者であることをあらかじめ知っていたのだからその
点を

もっと留意すべきであったのだ。

俺が前にでた時点で何かあると疑ってかかるべきだった。

両膝を突いた京楽の体がフラリと傾ぐ。

槍が突き刺さったまま京楽の鎧に包まれた体は横に倒れた。

「逃げていた方が賢明だったな。」

聞こえないその身にもはやどうにもならない選択の過ちを突きつける。

仮に逃げていたとしたら自分はこんな目にあう必要もなかったのだろうか。

そんなことを仮にこの京楽が考えていたとしてもそれはもう詮無きこと。

後で悔いると書いて後悔。

どこか捨て台詞じみた俺の言葉。虚空に消え行くはずのそんな言葉を

「それは貴様も同じではないのか、角川 七音。」

小波 優が、拾いあげた。

「いくつか質問がある。」

「答えられる範囲でなら」

気絶して地に横たわる京楽を見下ろしながら小波の言葉に応じる。

「何故こんな無茶をした？何故おとなしく隠れていなかった？

何故京楽に狙われていた？」

「……………何故、ばかりだな」

「そして何より、最後だ」

一拍おいて

「……………何を、した？」

こと最後の質問に至って俺はようやくまとまな返答を返す。答えな
いという答えを。

「答える義務は俺にないな。そんなことはどうだっていいことだろ
う。」

過程はどうあれお前は騒動を治めることができた。

俺の危険も回避された。

結果を見ればひとまず万事解決といったところじゃないか。それに
……………」

一呼吸おいて俺は小波の方を振り向く。

「聞かれたくないことがあるのはお前も同じなんじゃないのか？」

それは当を得た発言だったのだろう。

相変わらずの無表情のまま小波は何もいわず立ち尽くしていた。

牽制しあつかのように俺と小波の視線がかち合う。

値踏みするような目で小波は俺を見ていた。

それは俺の方も同じで小波をまじまじと見つめる。

互いが互いに暗黙の了解を得た人間観察。

物音一つなく、その場をただ沈黙だけが支配していた。

そして得た結論は俺にとってあまり好ましくないものであったように思う。

浮かんできたイメージは鏡。

直感的に悟ってしまった。

小波 優はどこか人間としてのタガが外れた自分と似ている節のある人間である、と。

そんな事件現場の重苦しい沈黙を断ち切ったのは遠くから聞こえてきた

複数のサイレンの音だった。

それは徐々に音を大きくして付近に近づいてくる。

やがてブレーキ音。

最初に到着したのは灰色を基調にした車だった。

それが複数台。

こんな現場に一般車が来る事はなく、かつ、複数台とは組織的なものである。

ことの証明。

しかし警察ではない。

バタバタとドアの開閉する音に続いて中から次々に軍人じみた

近未来装備に包まれた人々が出てくる。

対衝撃緩衝スーツ、フルフェイスの銃弾すら弾いてみせる頑丈さを

誇るヘルメット。

肘、膝等の関節部には保護サポーター。

一見軽装に見えなくもないそれらは外見に反した防御力を誇り、

かつ、装着者の動きを極力阻害しないようにできている。

それらは対能力者を想定した装備である。

そう、彼らこそがこの街の能力者関連の事件を担当する組織、ゴスペル。

続く彼らの行動は迅速で訓練された動きでテキパキと救助活動を始めた。

瓦礫の下に埋もれた人、車の中で気を失っている人、

壁にもたれてわずかな呼吸をする人。

それらは担架に乗せられてすぐ後に到着した救急車に運び込まれる。

遅れてゴスペルの車の一つから一人だけ服装の違う白衣を纏った

長身の男が出てきた。

年は30代といったところか。

一目でこの中で偉い人間であることが伺えたものの外見はともそうは

見えず、髪は整っておらずボサボサでいかにも洗髪した後放っておいたままですと

いった風。

無精ひげもその威厳を削ぐのに一役買っており状況を見ず、見た目だけで

判断するならそこらにいる無職の中年親父と大差はない。

「おつかーれさん、優」

その男はこちらに歩いてくるなり小波を労った。

「名暮……」

「後始末は俺らに任して後は下がっていいぜ。治療しなきゃいけないだろ？」

妙な言葉遣いの名暮と呼ばれた男は小波に下がることを促した。

事実今もまだその痛々しい傷口からは出血が続いている。

止まることなくドクドクと。

見れば制服の色の黒の割合が随分増えたように思う。

「……………あのビルの中に一人女子高生が倒れているから

この男子高校生ともども保護を頼む。」

「あいよ、頼まれたー」

男がひらひらと軽い調子で手を振る。

小波は腑に落ちない、納得できないといった表情をしつつも静かに去っていった。

……これは少し面倒なことになるかもしれない。そんな予感があった。

「じゃ、行こうぜ少年。つっても少年は怪我なさそうだな」

「なんとか、ですが」

「ふうん、運がいいねえ。あ、優のいつてた女子高生の場所分かる？」

「はい、知ってますよ。」

「そかそか。じゃあそこまで案内してついでに運ぶの手伝ってくんない？」

「……いいですけど。でも自分で運ばずとも部下の人に命令すればいいんじゃないですか？あなた、結構偉いんでしょう？」

「お？分かつちゃう？偉いオーラにじみ出ちゃってる？」

「単なる状況判断です」

「タツハー、きつついなあ最近の若者は」

おどけるように男がいった。……言葉遣いといい性格といい、どう

にも

癖のある人物のようだ。

と、自分の癖とも言える人間分析をついしてしまつ。

「んー、まあそうなんだけどさ。でもほら、優と約束したし。

俺が運ぶって。

それに若者と運動する機会って俺にとって貴重なのよ。

人助けと思って手伝ってくんない？」

「……………まあ、そのくらいなら」

不二家を運ぶくらいなら引き受けてもいいだろう。

そもそもが乗りかかった船だ。

途中で不二家を放り出して人任せにするのはなんとなく後味が悪い。

「ほんじゃあ、案内よろしくー」

「そついつつ先導するのは矛盾があるかと。場所、分かるんですか？」

「お、そうだった。つい先走っちゃったぜい」

ふう、と一つため息をつく。本当に読みにくい性格だ。

そしてなによりふざけてる。俺は心の内で毒づいた。

「……………こつちです」

そういつて案内を始める。そんな何気ない会話を交わして思う。

一つの事件は収束をを迎えたのだという実感。

かくして危機は去り、日常へと舞い戻る。

終わったからこそ思うことだがとても刺激的な経験だった。

自分に向けられる殺意、悪意、敵意。

決して日常では経験しえない安全装置のないスリル。

こんな経験そうはない。

と、考えれば俺は貴重な経験をしたのかもしれない。

結果からいえば自分は後遺症一つなく切り抜けることができたのだ。

今回のことは不幸と捕らえず幸運とポジティブに考えてみるのも

いいかもしれない。

非日常から日常へと思いを馳せる最中、のんびりと俺はそんなことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4929x/>

ジェネティック・レボリューション

2011年12月19日01時50分発行